

# 「知的障害生徒の余暇の充実に向けた授業」

—楽しさの共有を通して—

村上 穂高

(京都教育大学附属特別支援学校)

## A Class of Full Leisure for Children with Intellectual Disability

—Through Share of Pleasant—

Hodaka MURAKAMI

**抄録：**知的障害生徒の余暇の充実に向けた取り組みとして、様々な余暇を体験し仲間とともに楽しみや喜びを共有するとともに、他者の余暇への関心を広げる取り組みを行った。結果として生徒は、余暇に対する自身の意思や価値を意識するとともに、仲間の余暇についても興味を示し余暇の選択肢を広げることができた。

**キーワード：**知的障害, 余暇, 意思決定

**Key Word:** Children with intellectual disability, Leisure, Decision making

### I. はじめに

知的障害児の余暇については、古くより課題とされてきた。1970年代より北欧を中心に広まったノーマライゼーションの原理では、その文化における一般的な水準の生活形態や生活状況を権利として得られることを主張されたが、バンクトは余暇活動が自己決定や他者との関係を築くうえで重要な機能を有しているとともに、社会的な知識や経験を得て、視野を広げ、自信をつけていくこと、そして市民参加や社会的関係を築き、自己認識を成熟させていく上で重要な働きを有していることを指摘した。(ニイリエ, 2004) 今日、障害者の権利条約、第30条においても「文化的な生活、レクリエーション、余暇及び、スポーツへの参加」が定められている。こういった社会的背景の下、知的障害者の余暇に関する取り組みがこれまでも様々な形で成されてきた。余暇に関する取り組みとしては、施設、グループホームの利用者に対する取り組み(村本, 2011)とともに、学齢期の生徒に対する取り組みや(和田, 2018年)(藤原, 2015)(加藤, 2019)、特別支援学校や特別支援学級における取り組みなどが報告されている。(高畑, 2000)(濱, 2012)(内田, 2011)(和田, 2018) こういった余暇を扱った取り組みの内容としては、複数人で行う活動、外出を伴うもの、一人で家庭や施設の休憩時間にできることなど、多様な内容の余暇への支援が報告されている。本論においてはこれまでの余暇に関する支援の現状を把握した上で、特別支援学校に在籍する知的障害生徒にとっての余暇の充実に質する授業の在り方について実践をもとに検討を行う。

### II. 現状の課題

まず、知的障害者の余暇と余暇の充実に向けた取り組みにおける現状と課題を整理する。

#### 1. 余暇の持つ本来の意義

これまでの、余暇に関する取り組みを概観すると、余暇の取り組みを行う上で「仕事と仕事の合間のすきま時間を適切に過ごす」(和田, 2018) ことや「余暇スキルを形成することで常同行動の減少を試みる」(村本, 2011) といった余暇スキルの形成を通して問題行動を修正すること、あるいは会話のスキル(加藤, 2019)の向上やコミュニケーションスキルの般化(実践障害児教育, 2020)、主体的な他者との関わりの意欲を喚起する(内田, 2011)など、余暇を手段として捉える取り組みが多くみられる。こういった取り組みが多くみられる背景としては支援者や指導者自身の内面においても余暇は労働に必要な活力を取り戻すためのものという意識があったことが推測でき

る<sup>注1)</sup>。余暇において「ただ単に楽しむこと」は副次的な要素とみなされてきた。丸山はこういった点に関して「余暇活動が何か別のことのための手段として位置付けられるならば余暇活動そのものの質への関心は薄れかねない」(丸山, 2016)と指摘し、楽しさや休息、或いは自己実現などの余暇本来の持つ意義を見直す必要を伝えている。(丸山, 2019) 余暇の取り組みを進める上で、楽しさや仲間との感情の共有、ゆったりとした時間の流れの中に身をおく経験など、余暇の持つ本来の意義を感じられる機会を用意する必要があるといえる。

## 2. 余暇における本人の意思決定の視点

余暇の選択に関して対象となる余暇が本人の高度な技術を必要としないこと、活動の遂行に関して家庭への負担が軽減できることなどを理由に支援者により選択されている場合や、本人の意思を考慮したとしても「音楽が好きな生徒が多い」(藤原, 2015)、「数字が好きである」(和田, 2018)といったような断片的に考慮している場合、活動の詳細な内容や行う時間に関しては支援者が選び実施している場合などがある。丸山は本人にとっての自由度の高い余暇の領域においては、自己選択・自己決定がいっそう強調されてよい(丸山, 2019)と述べている。余暇の内容は、選択の正誤を伴うものではなく、本人の価値や嗜好の下に選択され、実行されるべき領域であるはずであり、その意味で本人の価値や嗜好を育み自己決定につながる実践が求められる。

## 3. 消費社会や電子メディアが余暇に与える影響

知的障害者の休日の家庭外での余暇については「買い物」「外食」といった活動という費用負担のかかる消費的な活動が多くみられることが指摘されている(武蔵, 2009)。知的障害者が余暇において消費活動に過度に依存してしまう背景としては「他者の目を気にすることなく、本人だけで、あるいは保護者・家族と一緒にいることができる」(武蔵, 2009)という理由などにより、ドライブや、映画、旅行、ボウリングが選ばれるなどの特定の理由に加え、これまでの社会制度上の問題<sup>注2)</sup>や教育実践における偏りなども原因として考えられる<sup>注3)</sup>。この点に関し丸山は「一般によく見られる商業的な余暇活動を障害者にも普及させるといふ発想にとどまることなく様々な文化的の価値なども踏まえながら「豊かな余暇」を思い描くことが求められよう」(丸山, 2019)と述べており、「余暇を金銭によって買うという意識」(瀬沼, 1989)につながるような余暇の実践には、支援者や指導者自身が自制的になる必要もある。

また、家庭内における余暇の過ごし方としてはTVが最も多くビデオ、DVDなど、娯楽番組や映像や音楽のエンターテイメントを享受している状況や(武蔵, 2009)若い人に人にはラインやSNS、動画サイトなどインターネットを娯楽にしている比較的多いと報告されている(石部他, 2018)。こういった傾向は知的障害者のみに当てはまるものではないがTVが「メディアを通して広く子どもの社会の共同幻想に働きかける商品であり[中略]メディアミックス商戦の中心に位置づけられ関連商品の売上上げに貢献することを意図し」(高橋, 2006)た商業的なものであり同様に「インターネットの世界においても子供は大人同様にマーケティングのターゲットとなり消費欲求を絶えず刺激され」(天野, 2017)ているという現状に知的障害生徒本人が無自覚である傾向が想像でき<sup>注4)</sup>、メディアリテラシーを適切に伝えると同時に消費や電子メディアによる余暇以外の選択肢を広げる必要がある。

## 4. 余暇活動における関係性の乏しさ

こういった点に加え、知的障害者は、日常生活において関係性の広がりや余暇を過ごす相手が友人ではなく家族が中心となる傾向や、それに伴い暮らしの中で「友達が欲しい」「たくさん話したい」(石部他, 2018)と感じている様子が報告されている。こういった状況は、余暇を他者と楽しむ喜びを失うことと共に、余暇に関しても知的障害者が他者を通じて関心を広げることを妨げるなど、情報弱者となる可能性も想像される。

以上の点を踏まえると、余暇の持つ本来の意義(楽しさや喜び)を仲間や指導者と共に感じることや余暇の選択を関係性の中で広げること、自分の思いや価値を育む経験が求められていると考える。

### Ⅲ. 取り組みの概要

#### 1. 期間、対象生徒

2019年11月～12月にかけて特別支援学校高等部2年生を対象に、総合学習の時間で1回90分の授業を計5回行った。授業に参加した生徒はA君(IQ39)、Bさん(IQ31)というように抽象的な理解が難しい生徒とともに、Cさん(IQ51)、D君(IQ46)、E君(IQ63)というように経験や具体的な内容であれば抽象的な理解が可能な生徒など、知的なばらつきがあるクラスの生徒9名である。

#### 2. 授業の実施に先立って

##### (1) 生徒の余暇に関する現状の把握

前述した余暇における課題は、対象となる生徒においてどのように当てはまるのか、或いは他の課題が存在するのかわかる目的から、余暇の過ごし方について、9月からの2か月間、「休日の思い出を語る」という取り組みを担当の先生を中心に計8回、休み明けの月曜日に行い生徒の余暇の実態について把握した。生徒たちは休み明けに休日の思い出を「どこで、いつ、だれと、何をした、どう感じた」という質問に沿って発表した。話すことが難しい生徒は保護者に協力をいただき活動内容を伝えていただいた。そういった生徒たちの休日の様子の記録をまとめ、授業に先立って指導者でそれぞれの生徒の余暇の実態及び課題について検討し以下のような点が上げられた。

・**家での過ごし方についての選択肢が少ない** 家庭での過ごし方について「絵を描く」「ネイルを試してみた」(Cさん)など個性的な過ごし方をしている生徒もいた一方で、「TVを見る」「ユーチューブを見る」(Bさん)というように電子メディアを中心にした過ごし方をしている生徒も多くおり、「ゲームをしすぎて気持ち悪くなった」(E君)というように本人自身が活動を制限できていない様子も見られた。生徒たちの中には、デイサービスなどで「ババ抜きをした」「餃子を作った」など多様な経験をしていることも確認されたが<sup>注5)</sup>、こういった経験が家庭での過ごし方には反映されず、デイサービスの場合だけの特別な経験となっているようであった。

・**家族との関係** 生徒によっては、毎回の休日で「母とコンビニでお菓子を買う」(A君)というように、家族の支援によって余暇が成り立っている様子が見られた。また「家族でショッピングモールに買い物に行った」「家族に電化製品を買いに行った」というように、家族の用事に付き添っている活動が結果として余暇になっている様子も確認された。こういった点かこれまでも指摘されてきた余暇が家族の支援によって成り立っている様子や(郷間, 2007)逆に、家族の用事に本人が付き添うなど、思いなどを伝えきれていない様子などが想像された。

・**消費社会や電子メディアとの関係** 本人が友達と水族館などへ行くというほかに、特に家族でのショッピングモールの利用<sup>注6)</sup>などにおいて家族とファーストフードに行き食事するなどの消費活動を行っていた。また、「TVゲームをしすぎて気持ち悪くなった」など自身の余暇について反省的に捉えている生徒もいた。

・**意外な内容** 生徒の中には「家族と扇風機を片付けた」「祖母の家で絨毯を運んだ」(E君)といったような手伝いや「一人で散髪に行った」(D君)というような身の回りの行為も「苦労したけど楽しかった」「さっぱりした」というように余暇として捉えている様子が見られた。こういった点を見ると家族に感謝される経験や一人で行動できた達成感など様々な経験を含めて経験を余暇と捉えている様子も見られた。

・**生徒による経験の偏り** 生徒たちの経験は、これまで報告されてきたように知的に重い障害を持つ生徒ほど、家庭での余暇の選択肢が少なく、家族の支援により余暇が成り立っている傾向、逆に家族の行動に付き添うなど、本人の意思が伝わっていない状態が感じられた。また、デイサービスの利用を除けば余暇を家族以外の他者と過ごしている生徒は少なく、関係性の広がりが見られない傾向も見られた。

##### (2) 授業の目標

こういった生徒の余暇の実態の把握と前述した課題意識を基に授業者(筆者、担任、副担任)で話し合い、生徒の余暇を豊かにしていくために、以下の点を目標として授業を計画した。

#### ① 家庭で行える余暇(消費活動や電子メディアによらない)を増やす

家庭での余暇が少ない傾向が見られることから、外出して行う行事的な余暇活動(和田, 2018)ではなく、自宅でできる日常的な余暇活動を中心とし、前述のように、消費活動や電子メディアによらない過ごし方についての選

択肢を増やすことを目標とした。家庭での余暇であれば、生徒によっては支援なくできる活動が多く含まれ、本人の興味や関心を大切に自身意思決定による余暇の選択が可能であると考えた。

## ② 自分の好みや意思を意識、確認する経験とそれにより余暇を選択できること

本授業の対象となる生徒においても、余暇の選択において家族の用事に付き合う様子などから、自分の好みや過ごしたい活動などに無自覚である様子が想像された。前述のように余暇は、自分の好みが優先されるべき領域であり、授業を通して、自分がどういったときに、楽しいと感じるのか、どういった過ごし方を好むのかを意識化できる機会を持ち、将来的に余暇を選択できるような経験を育みたいと考えた。

## ③ 楽しさや気持ちよいという感覚を意識する

経験を通して余暇のスキルを形成したり、すぐに日常生活に般化するのではなく「楽しい」「心地よい」というような余暇本来の意味を感じられ、余暇についてこれから積極的に充実させていこうと思えるような体験を踏むことを目的とした。

## ④ 他者の余暇について興味を持ち、他者と過ごす時間の心地よさを感じる

他者の余暇への関心を持つことを通して、余暇の選択肢を広げていけることを想像した。また、仲間との間に感じる心地よさを感じることで将来的にも余暇を他者と過ごす生活につながるようにと考えた。

### (3) 授業計画

各回の授業後に授業者間で生徒の発言や様子を振り返り、その後の授業内容を修正した。当初予定していた授業計画は、生徒の学びの様子と指導者の気づきをもとに、変更されていった。変更の過程も併せて記述する。

	当初予定していた計画と変更後の計画
授業に向けて (9月～11月)	・「休日の思い出を語る」という取り組みを担当の先生を中心に計8回実施、生徒の余暇の把握 ・教職員から余暇に関するアイデアを募集
1回目 (11月6日)	・「余暇について知る」・「これまでの過ごし方を確認する」・「余暇の振り返りチェック表を基にこれからの自分の目標を考える」・「先生たちの過ごし方を知る」
2回目 (11月19日)	・「先生の余暇の体験、塗り絵」→生徒の視点からの余暇の把握のため「過ごし方報告会」に変更 ・「先生の余暇の体験、自転車洗い」・「体験の振り返り」
3回目 (11月20日)	・「先生の余暇の体験、ストレッチ」 ・「先生の余暇の体験、塗り絵」→生徒が体験したいという想いが強かった「先生の余暇の体験、メダカの餌やり」と、生徒が紹介した余暇である「仲間の余暇の体験、ラジオ」を加える ・「体験の振り返り」
4回目 (11月26日)	・「先生の余暇の体験、パズル」→生徒の要望より・「みんなでおしゃべり」に変更 ・「体験の振り返り」
5回目 (11月27日)	・「先生の余暇の体験、カメラ」→生徒の読書体験が少ない実態から・「余暇の体験、読書」を加える ・「余暇の授業の振り返り」
授業後のまとめ	・「過ごし方のしおり」の作成→完成したしおりとして配布するのではなく、今後も充実していけるように過ごし方ファイルとしてまとめることとした ・家庭での余暇につながるように、保護者に体験の様子をまとめた学年だよりの配布と懇談会での活動報告を行うことを計画した。

### 3. 授業の概要

#### (1) 1回目の授業

他者の余暇への関心を広げるという目的より生徒にとって身近な教職員から余暇に関するアイデアを募集した。内容は、「家庭や身近な地域で行えること、お金をあまり使わないこと」を条件とした。15名ほどの教員に協力していただき、集まった余暇の中から、生徒が楽しめそうであること、難度が高くなく、新鮮味のあることなどを基準に検討し「切絵」「ストレッチ」「塗り絵」「(自転車の)洗車」「カメラ」「片付け」などを選択した<sup>(注7)</sup>。先生方には、余暇の内容の説明と本人がその余暇を行っている5分程度の動画の撮影を依頼した。1回目の授業ではこれまでの過ごし方を表にした内容を示し、本人達が自身の余暇を確認できるようにした。また、「余暇の振り返りチェック表」を作成し、「自分でやりたいことが決まっている」「家族についていくことが多い」「お金をつかいすぎてし

まう」「いえではTVやゲームをしていることがおおい」「家でべつのごしかたをしりたい」などについて記入し、自身の余暇を振り返るとともに、これから充実させていきたいという意欲につながるようにした。

#### ① 1回目の授業での生徒の様子

はじめに、人の一日は働いたり学んだりする時間と、自分の好きなように気持ちよく楽しく過ごす二つの時間があること、両方のバランスが大切であることをパワーポイントを見ながら確認した。「これまでの過ごし方を確認する」学習では、自分のこれまでの余暇の内容がまとめられた表が提示されると、Bさんも「わたし」というように手をあげたり、歌いだすなどをして自身の余暇を再現する様子が見られた。余暇の振り返りチェック表を基にこれからの自分の目標を考える活動では、「家族についていくことが多い」という質問に「休日は家族についていきます」と答える生徒もいる反面、回答項目にない△を書き足す生徒(Cさん、D君)もあり、家族と離れて自分で行動できるようになってきたことを意識している様子が見られた。「お金を使いすぎてしまう」という項目では、「昔は使いすぎてしまった」ということを話す生徒が3人もおり(Cさん、D君など)金銭面でのこれまでの失敗経験を想像させた。自由記述では、「けっこういそがしい」と書いた生徒が複数おり、休日に時間的なゆとりがない様子も明らかになった。いずれの生徒も「もっといろいろな過ごし方をしりたい」に○をつけており、余暇を広げることに関心する気持ちが伝わってきた。「先生たちの過ごし方を知る」では生徒たちの身近な先生の過ごし方を紹介したパワーポイントを見て、「〇〇先生の趣味は片付けなんだ」と笑うなど、好きな先生への思いも加わって新たな余暇を経験したい思いを強くしていた。最後に、今後経験してみたい活動を選択する活動では「カメラ」「塗り絵」「洗車」等のほかに「メダカの餌やり」など意外な活動に生徒たちの興味が引かれていた。部屋の片づけなどは選ばれず、生徒が普段とは違う経験をしたがっている様子も推測できた。

#### ② 1回目の授業後の検討

生徒が金銭のやり取りに関しては数人の生徒が苦手意識を持っており、こういった経験が一人での行動を抑制していることが想像できた。また、生徒たちが忙しい休日を送っていることもわかり、ヘルパーの利用や習い事に関しても、自分の意思をどれだけ伝えられているのかを今後、確認していく必要を感じた。何より、生徒がこれまでの自分の余暇について嬉しそうに話したり、仲間の余暇に興味を持っている様子も見られた。指導者の余暇のみではなく仲間の余暇について関心を広げることや、本人たちの視点からも余暇を捉えなおす必要を感じた。そのため、次の授業では、余暇の体験に先立って、本人たちの過ごし方報告会を設定することにした。

### (2) 2回目の授業

前回の検討会での意見より仲間の余暇にも関心を広げるため「過ごし方報告会」を設定した。内容は「家庭での私の好きな過ごし方」という題で「あなたは、家で、誰と、どんな過ごし方をしているときがしあわせですか?」「その時はどんなきもちになりますか?」について発表した。一人での回答が難しい生徒には、保護者に事前に記入して頂き、本人の様子や内容が分かるような写真やイラストの添付もお願いした。仲間の余暇に関心を広げるとともに、自分の余暇について仲間に認められることで肯定的に捉えることや、今後、余暇を選択していくためにも自分がどのような時に楽しい、気持ちよと感じるのかを意識するという狙いがあった。後半は前回選んだ「先生の余暇」について体験を行った。

#### ① 授業での生徒の様子

「過ごし方報告会」では、E君が「家でラジオを聞く」と報告したことが他の生徒にとって新鮮だったようで、皆、興味が引かれている様子だった。Cさんは、「ファッション雑誌を読む」という余暇を発表した後、その時の気持ちを「わくわくします」と伝えていた。ゲームと答えた生徒(E君)も、内容としてはTVゲームのほかにパドミントン、将棋、トランプなどと多様な内容を答えてくれ、「家族とやります」「うれしい気持ちになります」と報告していた。毎週、家族とコンビニに行ってお菓子を買い、A君は、プリントにたくさんのお菓子の写真を保護者が張り付けてくださっており、本人はその写真を指差し、それぞれのお菓子の名前を嬉しそうに答えており、他の生徒からの好きなお菓子などの質問には、笑顔で写真を指差ししていた。過ごし方報告会の後、仲間の余暇に興味をもった余暇を選んだ。ラジオに興味を持った生徒が多かったことやソファで寝たいという生徒が二名いた(この生徒は以前も自分の余暇を振り返り忙しいと答えていた生徒たちであった)。ラジオを趣味と答えた生徒(D君)は、み

んなに聞いてもらうために番組のタイトルを記入した紙をもってきていた。そのあとの余暇の体験では、1回目の授業で、生徒が興味をもっていた余暇のうちの一つである自転車の洗車について、余暇の紹介者の先生の3分程度の動画を見て方法などを確認した。生徒たちは「やったことない」「洗ってみたい」と答え、学校で休み時間につかっている自転車を洗うことを誘いかけた。自転車洗いが始まると、「こんなことやったことない」(Cさん)という生徒もおり、水をかけるのを楽しむ生徒(D君)や、オイルを吹きかけるのを楽しむ生徒、細かい点まできれいにしようとする生徒など、各々が楽しんでた。Bさんも体験が始まるとホースをずっと使っていたり、嬉しそうにブラシで磨いている様子があった。体験中に、偶然通りかかった他の学年の指導者たちに「ありがとう」と言われると、皆、意外そうな表情をしていた。磨き終わると、「これ〇〇君がいつも乗っている自転車だ。綺麗になったの気づくかな」と言っている生徒(Cさん)もいた。授業後の感想では、全員が「たのしかった・またしたい」に〇をしており、自由記述では「めったにできないから(楽しかった)」という答えを書いている生徒もいた。

## ② 2回目の授業の検討

生徒たちが自分の余暇を知ってほしいと感じている様子や、仲間の余暇に関心を広げる様子が伝わってきた。ゲームや携帯電話の利用といったこれまで、知的障害者に多い過ごし方であっても家族と一緒に楽しんだり、友達とつながっていることがうれしくて行っていたり、お菓子を毎回コンビニに買いに行く生徒であっても、様々な種類のお菓子について嬉しそうに皆に話す様子から、必ずしも余暇の内容が貧困であるとは言えないことがわかり、反省させられた。また、余暇をしている際の気持ちについても「楽しい」「落ち着く」という想いととも、「わくわく」というように知的好奇心を示す生徒もいた。余暇が人間発達の機能(丸山, 2019)にもつながっていることを改めて感じさせられた。余暇を通して人とつながったり、人間的成長を遂げる様子が生徒の視点から理解できた。一方、仲間の余暇に関して「ソファで寝転びたい」を選ぶなど、従来語られていた事とは反対に彼らの生活が近年、忙しくなり疲れている様子も感じられた。洗車の体験に関しては、危惧していたような仕事として捉える生徒は見られず、抽象的な理解が難しい生徒でも楽しそうに磨いている様子が印象的であった。身の回りの役割なども条件によっては余暇として楽しめることがわかり、今後の余暇の広がりを感じた。Cさんの「綺麗になったの気づくかな」という言葉のように、人に喜んでもらえることも余暇活動の原動力であると感じた生徒もいたようである<sup>註8)</sup>。授業後の検討では、生徒たちの過ごし方の中に、本を読むと答えた生徒が少なかった点に注意が寄せられ、本人たちが余暇として読書を楽しめるような経験をしていく必要性も感じた<sup>註9)</sup>。また、授業で指導を行った指導者の中からは、「楽しむ時間というのが、これまでの指導とは違い難しく、つい磨き足りないところを指摘してしまった」などの反省点が出た。指導者自身も生徒とともに、楽しい時間を共有するという気持ちを持つことが大切であることを確認した。

## (3) 3回目の授業

生徒たちが興味を持っていた余暇を体験した。メダカについては他学部が飼育しているメダカを貰うけた。塗り絵に関しては市販の物ではなく紹介者の指導者より手作りの塗り絵を提供して頂けた。前述のメディアリテラシーの観点よりキャラクターの描かれた物は使用を控えた。それらに加え、仲間(D君)が紹介してくれたラジオなどの余暇も皆で聞く時間をとった。

### ① 3回目の授業での生徒の様子

「ストレッチ」では陸上競技が専門の担任の先生よりストレッチのやり方や簡単なトレーニングを教わった。トレーニングが進むにつれ「しんどい、こんなの余暇じゃない」言う生徒(D君)もおり、余暇と捉えられなかった生徒もいた。ただ、「きつい」「足がいたい」と言い合いながらも仲間と一緒に体が伸びる感覚や、苦しさなどを共有する楽しさも感じている様子であった。生徒によっては、足の伸びが足りていない生徒もいたが指導としては無理のない範囲で体を支える程度にし、前回の検討でもあったように楽しい雰囲気ですぐ終わるようにした。「塗り絵」では「できたら(塗り絵の作成者に)見せにいく」と嬉しそうに仕上げる生徒もおり、A君、Bさんも含めほとんどの生徒が集中して取り組んでいた。同時間に前回D君が紹介してくれた余暇であるラジオを聞いた。本人がラジオカセを操作し、苦労しながらチャンネルを合わせ、ようやくラジオから演歌が流れた。「知らない曲がながれてる」と喜ぶ生徒もおり本人も嬉しそうに笑顔をみせていた。「メダカの餌やり」では、Bさんが自分からメダカの水槽に

網を入れようとしたり、捕まえたメダカの袋を嬉しそうに教室に持って帰ったりする様子がみられた。「体験の振り返り」ではストレッチに関して D 君が「体がかたい (から嫌だった)」という理由で「やりたくない」を選んだが、他の生徒はもう一度やりたいに○をつけていた。

#### ② 3回目の授業後の検討

ストレッチでは生徒から初めて「もう、したくない」という回答がでたが、生徒が自分の意思を自覚しえたという点ではよい機会とも考えられた。そして、抽象的な理解が難しい生徒であっても、メダカを見て嬉しそうな表情を見せるなど、体験を通して自分の意思を行動で表現できることと周囲も本人の意思を確認できることがわかった。

#### (4) 4回目の授業

他者と過ごす時間を心地よく感じてほしいという目標と、生徒が携帯電話などで仲間とつながっている現状や、「仲間ともっとおしゃべりをしたい」という意見がでたことから「おしゃべり」を余暇の内容として組み込んだ。仲間との話し合い活動に関しては自閉症スペクトラムの生徒も含まれるため、興味のない話題や自分に関連しない話題では話し合いが続かないことが予想された。加藤の「趣味トーク」(加藤他, 2019)を参考にし、自分の好きなものやことについてそれぞれが紹介し、話しあう場を設定した。また、抽象的な理解が難しい生徒のことを配慮し、言葉だけのやり取りにならないように、好きなものに関連する具体的な物を家庭よりもってくるようにした。自身の好きなものを話すだけではなく、他者の好みや価値に触れることで関心を広げることも狙った。

#### ① 4回目の授業での生徒の様子

話しやすい暖かな雰囲気を作るため、床にマットを敷いて座るようにした。報告会が始まると自分から早く報告したいという生徒がたくさんいた。Bさんは家から「お母さんと一緒」のDVDを持ってきており、モニターで流すと曲に合わせて嬉しそうに踊りだした。他の生徒もBさんと一緒に踊り教室に一体感が生まれた。電車が好きだと周囲が予想していた生徒が、オオサンショウウオのぬいぐるみを大切に持ってくるなど、仲間の意外な趣味が分かる場面もあった。自分の子どもの頃からのアルバムを持ってきていた生徒は「これはディズニーに行った時の写真です。」「これは中学校の頃の担任の先生の写真です。一番好きです」とそれぞれの写真にまつわる思い出を語りだした。他にもファッション誌をもって来る生徒(Cさん)や、毎日抱いて寝ているぬいぐるみを持って来る生徒もおり、嬉しそうに発表するとともに、仲間の発表にも興味を持ち「どこで買いましたか?」「どんな気持ちになりますか?」というように質問を重ねていた。子供のころより続けてきた水泳について語ったE君が「じつは、今年でやめないといけないんです」と答えたときには、「寂しいですか?」「仲間に別れは言うつもりですか?」と、自分の事のように受け止めて想いを共有する場面も生まれた。振り返りでは、「皆のお気に入りの物が知れてよかったです。授業中にゆっくりと会話をした事が楽しかったです。」(Cさん)という記述がみられた。

#### ② 4回目の授業の検討

好きなものについて話すという内容が生徒には新鮮な様子であった。抽象的な理解が難しい生徒も、家庭で見ているDVDを皆と一緒に見て嬉しそうに踊ったりするなど、皆に伝えたい思いが伝わってきた。また、普段とは違う仲間の一面を知れたり、仲間が自分の持ってきたものを大切に扱っている様子を見守ることで、お互いの大切な物を認め合うという暖かな雰囲気が教室に流れていた。水泳教室を辞めざるを得ない生徒の寂しい思いに共感し、一時教室に静寂が訪れるなど、普段の教室の場面では話せないような内容を話しあう機会ともなり、他者と話すことの楽しさやその場に流れる暖かな雰囲気を共有することの心地よさをそれぞれの生徒が感じられたようであった。

#### (5) 5回目の授業

最終回となる5回目の授業では、カメラを使う余暇を体験した。カメラに関しては、被写体を中心に据えるなど、構図を意識した撮影の仕方を、美術科の指導者より指導して頂いた。一眼レフなどの高価な機材を使うのではなく、家庭にあるカメラや携帯電話の撮影機能を使うことを前提とした。撮影の構図は、「三角形のおにぎり型」「被写体を挟み込むサンドイッチ型」など、わかりやすい説明を用いた。また、検討会でもあった、少しでも本への興味を広げてほしいという想いから、知的障害者にとってわかりやすく書かれた本であるLL本や写真集などを用意して、「文字のない本の読書」について紹介した。

#### ① 授業での生徒の様子

「カメラで撮影」では一人に一台のカメラを渡し校内を散策した。カメラを持った瞬間に、生徒達はこちらが促す必要がないほど、撮影に熱中していた。生徒により撮影対象の選択に個性がでており、揺れるブランコを撮影する生徒、好きな先生や好きな友達を撮影する生徒（Bさん）、花や木の実などを撮影する生徒（Cさん）など、それぞれが思い思いに撮影を楽しんでいた。抽象的な理解が難しい生徒においても動く指導者を意図的に連続して撮っている生徒や、仲間や先生にはっきりとピントを当てて写真を撮る生徒（Bさん）など、本人の意図がよく感じられる撮影の仕方であった。撮影をしながら、校内を散策するなかで生徒たちは、自分で撮影対象を求めてグラウンドや作業場などを行き来していた。教室に戻ってから、各自の撮った写真を鑑賞したが、皆、仲間の視点に興味を持って互いの写真をみていた。撮影した理由を語る生徒もおり、それぞれが写真にこめた思いも確認することができた。「文字のない本の読書」に関しては、何点かの写真集を紹介し、教室の余暇コーナーに掲示することとした。余暇の学習全体の振り返りでは、「楽しかった」「皆のお気に入りのものや先生の過ごし方などを知れてよかったです」「自転車洗いをもう一回したい」「家庭でもしてみたい」という意見が記入されていた。

#### ② 5回目の授業の検討

抽象的な理解が難しい生徒たちがカメラの撮影を楽しむことができるのかが、授業前から不安であったが、むしろ、そういった生徒たちが言葉の理解の壁を越えて写真という画像で自分をいつも以上に表現している様子であり、こちらの思い込みを反省する結果となった。また、仲間とともに、陽光の下で、被写体を探して歩くことは生徒にとって心地よい経験だった様子であり、見慣れた学校の風景がカメラを持ち歩くことによりまた違った意味を帯び、学校の魅力を再発見する結果ともなっていた。

#### (6) 余暇の授業、その後の取り組み

5回の授業を終えて生徒の中には、「切絵を体験したかった」（E君）というように体験したい余暇がさらに生まれてきた。今後は休み時間や今後の空き時間でさらに体験を進めていくこととした。また、これまで体験したメダカの水槽や、写真集などの余暇をまとめたコーナーを教室に作り休み時間などに継続して楽しめるようにした。また、生徒が体験した余暇について写真や感想をまとめた「余暇のしおり」づくりを計画していたが、綴じてしまうのではなく今後も充実させていくために、「過ごし方ファイル」としてまとめた。学校での体験が、家庭での余暇につながるように、保護者に体験の様子をまとめた学年だよりの配布と懇談会での活動報告を担当が行うこととした。

## IV. 取り組みのまとめ

本授業では、これまでの知的障害者の余暇を巡る状況と実践上の課題を整理した上で授業を行った。本授業での取り組みを通して明らかになった点と今後の課題を以下にまとめる。

### 1. 本授業を通しての考察

#### ① 余暇の持つ本来の意義について

本授業では手段としての余暇ではなく「楽しむこと」「気持ちよさ」を感じるといった余暇本来の意味を生徒に伝えることを目標とした。陽光の下で、自転車に水をかける生徒からは「気持ちいい」という声が聞こえ、ラジオを聞きながら塗り絵を行う活動では緩やかな雰囲気教室に生まれた。これまでの余暇についての実践では、余暇を体験している時に、生徒がどのように感じているかについての注目がされてこなかったが、余暇を充実させる原動力は生徒の「楽しい」という感情や「気持ちいい」という感覚であり、具体的な行動の形成だけではなく、その基となる感情を体験する必要があることが確認した。

#### ② 自分の思いに意識をむけた意思形成を意識した学習

余暇を選択する主体として、本人が自身の思いや価値を意識できるようにすることが本授業のもう一つの狙いであった。本授業では、「過ごし方報告会」において好きな過ごし方をしている際の、自分の気持ちを発表しあったり、みんなで「おしゃべりの体験」の時に、自分の好きな物について発表したりするなど自分の思いへの気づきを促す機会を組み込んだ。生徒たちは、余暇の報告では余暇を体験している時の気持ちを「わくわくする」「落ち着く」と



表現していた。また、今後の余暇を主体的に選択できるように、毎回の授業で「またやりたい」「やりたくない」という振り返りを行った。「また、やりたい」と答えた生徒が殆どであったが、ストレッチやトレーニングなどを「もうしたくない」と答えた生徒もいた。こういった体験を通して生徒達は、自分の思いを形作る経験や、思いを尊重される経験や、そして自分の余暇は自分が選べるということについて意識的になることができていた。また、抽象的な理解が難しい生徒であっても、体験を中心として授業を組み立てることで、本人が何に興味を持てるのか、周囲の者が理解し、本人も意識できるということがわかり、余暇における今後の支援の在り方にも示唆を得た。

### ③ 仲間の余暇についての関心の広がりと思いの共有

本授業の当初の計画は「先生の余暇を体験する」であったが授業を行う中で、生徒が仲間の余暇に関心を抱いていたことから生徒達による「過ごし方報告会」を行った。生徒は、嬉しそうに自分の余暇を説明したり、みんなと聞こうとラジカセを持ってきたりした。結果として仲間の余暇を「私もしてみます」と取り入れた生徒もいた。「おしゃべりの体験」では楽しさとともに寂しさなどの感情も共有した。余暇は他者と楽しさをはじめ様々な感情の交流を生むものであり、その交流の中で自身の価値や嗜好も深まっていく。今後の取り組みでも余暇を通して他者を知り、関係を深め、その中で自己の興味を変化させていけるような経験を創造する必要があると感じた。

### ④ 授業を通じた指導者の意識の変化

当初課題として捉えていた「ゲーム」や携帯電話でのメールやラインという余暇も、それを通して、家族や仲間とつながる経験を楽しんでいる様子であり、毎週同じようにコンビニでの買い物をする生徒も嬉しそうにお菓子の名前を皆に告げるなど、固有の喜びが明らかになった。生徒の余暇を検討する上で、指導者などの余暇を理想として、課題を見出すという視点だけでは生徒の余暇の充実にはつながらないという反省を得た。余暇について、個々の文脈を理解して受け止め、本人もまた現在の余暇を肯定に捉えられるようにすることで、さらなる充実が可能であると考えられる。また、生徒によっては、日常を「忙しい」と感じており、「ソファで寝転びたい」と休息を求めている様子も見受けられ、生徒の日常が様々な福祉サービスの利用や、習い事などで窮屈になっていないかの検討も今後必要であると感じた。そして、特別支援学校の授業においては、働くことの意義については進路学習などでこれまで深められてきたが、本授業のような「楽しむこと」「心地よく過ごすこと」を中心に据えた余暇の取り組みは少なく、指導者にとっても意識の変化を迫るものであった。余暇の授業を通して「生徒のことを以前より知れてまた好きになった」という意見もあり、生徒のありのままの姿を見つめる機会ともなった。また、生徒とともに体験をしながら指導者も塗り絵に夢中になる姿や、カメラを趣味で始めたいと思うなど、生徒と指導者という立場や知的障害のあるなしに関わらず、授業を通して自身の余暇を見つめる機会とする必要を感じた<sup>注10)</sup>。

## 2. 課題

### ・余暇の継続について

本授業では、生徒が様々な余暇を楽しむ経験や、様々な余暇を自分の意思で選択すること、自分の好みや気持ちを表現することを目的とした。こういった体験は、即自的な行動の形成を目的とするものではないが、結果としてどのように生徒の余暇の生活を変化させたのかについては、今後、検討を加える必要がある。今後、生徒がどのような変化をしたかについて、保護者や本人から聞き取りを行いたい。また、余暇に関する学習を継続していくことや、学校内において余暇を支援していける人的、物的、場所的な内容について検討を行う必要を感じた。本授業では、余暇コーナーを今後も継続して教室に設置することを行ったが、休み時間における余暇の支援を行う余暇ルームの開設など、学校内における余暇の拠点づくりを構想していく必要もあるだろう。

### 注釈

注1) 瀬沼は、日本人において余暇が「ひたすら明日の仕事に備えて疲れを回復しておく時間」(瀬沼, 1989)と捉えられている点を早くから指摘していたが、現在においても意識が大きく変化したとは言いがたい。

注2) 一つには、知的障害者の生活を巡る状況に関して、労働の機会やそれによる所得の保障を優先して考えてこられた点がある。例えば、施設やグループホーム入所者に関しては、消費に必要な所得を一定程度保証する制度が存在し、一人暮らしを除く障害者への所得支援は施設やグループホームでの生活の場合は、「十分満足とはいえず

とも障害基礎年金のみの収入でも最低限のお金は本人の手元に残るように」（渡部，2016）になってきており，知的障害者と消費による余暇活動を結びつけやすくなってきた。

注 3) これまでの教育実践において，知的障害児に対する金銭の管理能力を引き上げることを一つの目的として校外学習での外食などお金の使い方を学ぶ学習や小遣いの使い方を通して将来のお金の使い方と貯金の仕方などを学ぶ学習などが取り組まれてきたことも生徒の消費傾向に影響を与えてきたと考えられる。

注 4) 天野は「多くの国々が子供たちを特別な配慮を必要とする特別な集団とみなし[中略]直接的なマーケティングや広告から子供を保護する」という社会的合意を政府・消費者・企業それぞれ形成しつつある」（天野，2017）としつつ，日本における子供向けマーケティングにおける制度の未整備を指摘しているが，知的障害児と広告マーケティングの関係については，子ども一般の問題以上に検討されてこなかったといえる。

注 5) こういった社会福祉の教育的機能に関しては，（丸山，2004）で既に指摘されており，社会福祉の教育的機能以上に教育における福祉機能について十分に理解される必要がある。

注 6) ショッピングモールは複数の店舗が一つの施設に集められているという点で知的障害者本人やその家族が利用しやすい施設であるが，ショッピングモールが本来的に消費を喚起することを目的とした施設であることや，街を歩くことによって得られる買い物以外の楽しみが経験されないことは考慮しなければいけない。

注 7) 洗車は車がある生活を前提とすることが環境問題など今後求められるライフスタイルなどの点から問題であると考え，生徒も使用する自転車へと変更を加えたが自転車そのものが環境に良いかはあくまでも相対的な基準に過ぎない。また，筋肉トレーニングは健康で屈強な肉体への憧れを喚起することを懸念してストレッチとしたが，こういった変更にはある程度の指導者の考えの偏りが反映されざるを得ない。

注 8) ましこは，生きるという現実を生理的時間/義務的時間/自由時間というように分割できるという従来の視点が主婦のシャドーワークなどを隠してきたことを指摘しており（ましこ，2018）その意味で人の役に立つ余暇は暗黙の強制を通して本人の意思が阻害されていないかなどの注意を払う必要がある。

注 9) 知的障害者の読書環境の未整備とそれによる情報弱者としての実態，読み書きを中心とした社会の在り方や，それに対する今後の展望に関しては特別支援教育実践においても取り組まれるべき重要な課題である。

注 10) 安井は，ドイツにおける障害者の余暇を支える主体の一つであるスポーツクラブが，障害の有無に関係なく基本的に多様な人々（性別，世代，民族，言語など）を受け入れる構造を持っており，日本のスポーツクラブが，単にスポーツを行う場となっていることを指摘している。（安井，2012）指導者自身の日常における余暇活動自体も，排他的な活動となっていないかなど，検討する必要がある。

## 参考文献

- ・藤原志帆，高森憲悟 2015 年「特別支援学校の生徒を対象とした余暇支援「おとあそび」の試み」『熊本大学教育実践研究』第 32 号 151 頁—159 頁
- ・郷間英世，藤川聡，所久雄 2007 年「知的障害者の余暇活動についての調査研究—通所授産施設に就労している人を中心に」『奈良教育大学紀要』第 56 巻 第 1 号 67 頁—70 頁
- ・濱 千沙登，関戸英紀 2012 年「自閉症児に対する塗り絵を用いた余暇支援とそのスキルの向上が対象児とその家族に及ぼす影響」横浜国立大学院教育学研究科教育相談・思念総合センター研究論集第 12 号 97 頁—110 頁
- ・石部和人，大西美佳子，梶谷素女，佐藤國夫，白石恵理子 2018 年「特別支援学校卒業生の余暇に関する研究」滋賀大学『実践センター紀要』第 26 巻 77 頁—84 頁
- ・加藤浩平，岩岡朋生，藤野博 2019 年「自閉症スペクトラム症児の会話の特徴と話題との関連：アニメ，漫画，ゲームを題材にした趣味トークの実践」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』70 号，489 頁—497 頁
- ・丸山啓史 2016 年「日的障害者の余暇をめぐる状況と論点」『障害者問題研究』44 巻 3 号 162 頁—171 頁
- ・丸山啓史 2005 年「知的障害者のホームヘルプの発達支援機能に関する考察」東京大学大学院教育学研究科紀要 401 頁—409 頁
- ・ましこひでのり 2018 年『あそび/労働/余暇の社会学』三元社
- ・村本浄司，園山繁樹 2011 年「情動行動を示す自閉症者に対する活動スケジュールを使用した余暇支援」『障害科

学研究』35号147-159頁

- ・永井聖二 2015年『消費社会と子どもの文化』学文社
- ・ニィリエ・ベント 2004年『ノーマライゼーションの原理』現代書館
- ・斎藤徹 2017年『ショッピングムールの社会史』彩流社
- ・瀬沼克彰 1989年『新余暇社会への展望—ゆとり時代の生活デザイン』日本能率協会マネジメントセンター
- ・鈴木勉・田中智子編著 2019年『新・現代障害者福祉論』丸山啓史「余暇の権利と社会福祉援助」法律文化社
- ・高橋勝 2006年『情報・消費社会と子ども』明治図書
- ・高畑庄蔵, 武蔵博文, 安達勇作 2000年「ボウリングお助けブックを活用した養護学校での余暇指導」『特殊教育研究』37号, 129頁-139頁
- ・武蔵博文, 水内豊和 2009年「知的障害者の地域参加と余暇活用に関する調査研究」香川大学 『人間発達科学部紀要』第3巻第2号 55頁-61頁
- ・武蔵博文, 水内豊和 2009年「知的障害者の経済的自立と家庭での役割や余暇活動の実態に関する調査研究」『香川大学教育実践総合研究』19号 39頁-48頁
- ・内田浩二 伊藤良子 2011年「特別支援学校における余暇活動の支援の在り方」『東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要』7号 141頁-145頁
- ・渡部伸 2016年『障害のある子が親なき後にお金で困らない本』主婦の友社
- ・和田充紀 2018年「自宅や職場で気軽にできる余暇活動に関する研究—知的障害特別支援学校における「ナンブレ」を活用した実践から—」『富山大学人間発達科学学部紀要』第13巻第1号 51頁-58頁
- ・安井友康 2012年『障害児者の教育と余暇』明石書店